

Press Release

自然と美のかたち
特別展
工藝
2020

Kōgei 2020
The Art of Crafting Beauty from Nature

9/21²⁰²⁰(月祝) ▶ II/15(日)

TNM 東京国立博物館 | 表慶館
[Ueno Park]

展覧会公式サイト <https://tsumugu.yomiuri.co.jp/kogeい2020/> 「紡ぐ」公式Twitter @art_tsumugu

東京国立博物館ウェブサイト <https://www.tnm.jp/>



令和2年度日本博主催・共催型プロジェクト

展覧会趣旨

東京国立博物館表慶館で、特別展「工芸 2020 —自然と美のかたち—」を開催いたします。本展は、世界から高い評価を得ている伝統工芸から日本工芸の作家の作品を一堂に会し、自然と工芸の関係性をテーマに展示することで、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成を図ります。

重要無形文化財保持者(人間国宝)や日本藝術院会員から中堅、次の世代を担う若手の作家まで、伝統的な素材を活用して現代の表現とする現役の工芸作家が一堂に集います。また、建築家・伊東豊雄氏によるデザイン性の高い空間で展示することで、工芸のもつ魅力と可能性を新たに国内外へ発信いたします。

関連企画の「Kōgei Dining」(10月石川県金沢市、12月静岡県熱海市で開催)では、装飾的な美しさだけではなく、生活の一部でもある工芸の持つ機能美にも焦点をあわせます。参加者と作家が交流する場を積極的に生み出すことで、工芸作家の活動の場が広がるような展開を試みます。

工芸と日本人の自然観

東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて企画された本展は、日本の生活の器を造形する作家や芸術を創造する現代工芸作家を幅広い世代から集めて紹介する展覧会です。それとともに日本博の総合テーマである「日本人の自然観」について工芸を通して紹介していきます。

本展の目的は、日本工芸の展示と伊東豊雄氏の「自然の生命の輝き」をコンセプトとした空間デザインによって、今日までに明らかにされなかった日本工芸の基層を形成する思想を言説化することにあります。戦後、日本工芸界がその理念と様式によって分断された団体や分野を一堂に会した展覧も企図しました。さらに日本文化の特異性即ち日本人の自然観に根ざした芸術思想を明らかにして、人間精神の価値観の転換や自然の本質の再発見を願っております。日本の文化や工芸には、人間と自然は一つの生命であるという世界観を持ち、自然を美として調和として捉える芸術思想があります。それは時代と国境を超えた普遍性と融和性があります。本展が、東洋の中の日本から工芸を世界に発信する意義がここにあると考えております。

開催概要

名 称	特別展 工藝 2020—自然と美のかたち— Kōgei 2020 –The Art of Crafting Beauty from Nature
会 期	2020年9月21日(月・祝)～11月15日(日)
会 場	東京国立博物館 表慶館
開 館 時 間	午前9時30分～午後5時 ※金曜・土曜は午後9時まで開館
休 館 日	月曜日 ※ただし、9月21日(月・祝)は開館、9月23日(水)は休館
主 催	文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、 東京国立博物館、読売新聞社
特 別 協 賛	キヤノン、JR東日本、日本たばこ産業、三井不動産、三菱地所、 明治ホールディングス
協 賛	清水建設、高島屋、竹中工務店、三井住友銀行、三菱商事
協 力	田島ルーフィング、竹尾、トキ・コーポレーション
キュレーション	内田篤呉(MOA美術館館長)、諸山正則(元東京国立近代美術館主任研究員)
会 場 構 成	伊東豊雄建築設計事務所
観 覧 方 法	事前予約制(日時指定券) 混雑緩和のため、本展では事前予約制(日時指定券)を導入します。 入場にあたって、すべてのお客様はオンラインでの日時指定券の予約が必要です。 詳細は展覧会公式サイト等でお知らせします。 ※観覧料金は後日、展覧会公式サイト等でお知らせします。 ※特別展「桃山一天下人の100年」(10/6～11/29)は 別途事前予約(日時指定券)及び観覧料が必要です。 ※展示作品・会期・開館日・開館時間・入館方法等については、 今後の諸事情により変更する場合がありますので、展覧会公式サイト等でご確認ください。
お 問 合 セ	03-5777-8600(ハローダイヤル)
展覧会公式サイト	https://tsumugu.yomiuri.co.jp/kogeい2020/
「紡ぐ」公式Twitter	@art_tsumugu



令和2年度日本博主催・共催型プロジェクト



「日本博」とは

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機に、総合テーマ「日本人と自然」というコンセプトの下、縄文時代から現代まで続く日本の美を国内外へ発信し、次世代に伝えることで、更なる未来の創生を目指し、2019年からスタートしました。文化庁、日本芸術文化振興会、関係府省庁や文化施設、地方自治体、民間企業・団体等の総力を結集し、日本の美を体現する美術展・舞台芸術公演・文化芸術祭等のプロジェクトを、四季折々、年間を通じ、日本全国で展開していきます。



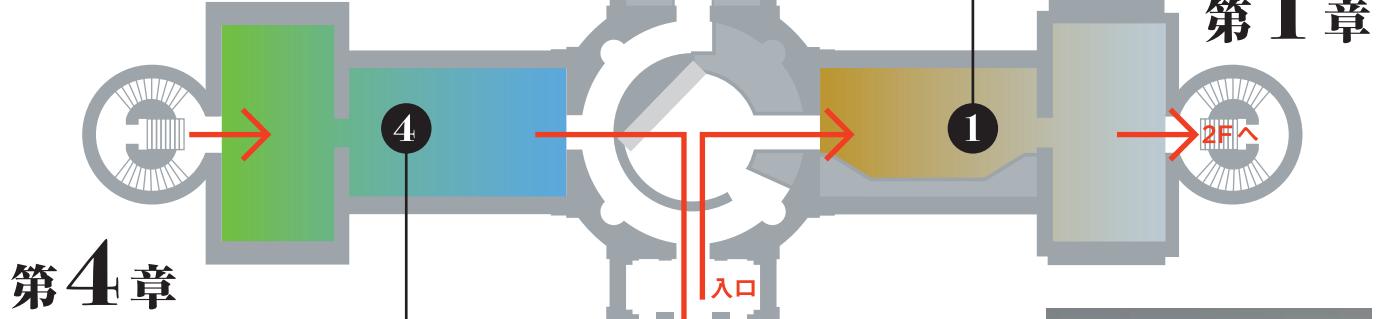
「紡ぐプロジェクト」とは

文化庁、宮内庁、読売新聞社が官民連携で取り組む「日本美を守り伝える『紡ぐプロジェクト』—皇室の至宝・国宝プロジェクト」は、皇室ゆかりの美術工芸品や国宝・重要文化財などの日本の美を未来へ伝え、世界に発信することを目的に、2018年11月にスタートしました。

本展のみどころ

1F

東京国立博物館
表慶館



【ガラス】
安達征良
硝子絹糸紋鉢「夕陽」
令和元年(2019)
個人蔵

水の青は時空を超える、 樹々と山々の 緑は生命を息吹く

日本では、自然との共生による密接な精神的感性と固有の生命観が芽生え、我が国特有の工芸を発展させてきました。それは、長い歴史と文化が形成されるなかで、変化に富む地形と四季折々の気候、そして豊かな風土に育まれた自然観を要因とすることが大きいと考えられます。日本が世界に発信する芸術文化を牽引する現代の工芸を一堂に会する本展では、82名の作家らが自由な感性によって多彩な芸術表現を發揮した、優れた近年の工芸作品82件をご覧いただきます。連綿と継承された伝統を踏まえつつ、自然と美のかたちとの関係性を造形としたそれらは、日本人の自然への愛情や畏敬の念をもって新しい自然観が表されたものでしょう。

金は永遠に光り輝き、 銀は高貴さに輝く



【漆工】
室瀬和美
柏葉蒔絵螺鈿六角合子
平成26年(2014)
個人蔵

第1章

◎作家コメント

室瀬和美(漆工)
秋陽の金色に輝く情景を表現。乾漆造形の合子に、柏の実を夜光厚貝で、葉は鉛板および金鑄粉と平目粉で蒔き分け、研ぎ出し蒔絵で仕上げています。

奥田小由女(人形)
東日本大震災の津波によって、海に流された多くの尊い命を安らかに天空に誘いたいと願いながら制作いたしました。

安達征良(ガラス)
和紙を透かして見たときの「やわらかい光」を表現し制作しました。白ガラスを粉にして押ししたものを高温で焼き付け、和紙のような柔らかな光を表現しました。



【人形】
奥田小由女
海から天空へ
平成30年(2018)
個人蔵



展示イメージ図 ©伊東豊雄建築設計事務所

本展では、第1章「金は永遠に光り輝き、銀は高貴さに輝く」、第2章「黒はすべての色を内に吸収し、白はすべての光を撥する」、第3章「生命の赤、自然の気」、第4章「水の青は時空を超え、樹々と山々の緑は生命を息吹く」という、大まかにした四つのニュアンスで構成しました。これらは、日本を歴史的に表象した天然の煌めきや、自然を彩る根源的な黒と白であり、また工芸素材の色合いや自然の形象を彩る、いながら生命の象徴であろうと考えます。

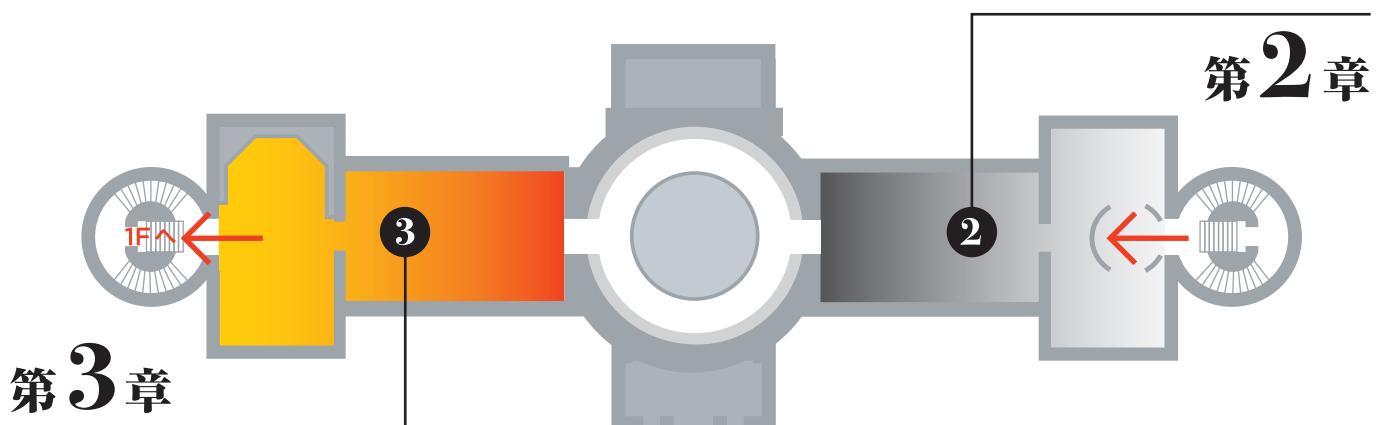


左:【金工】
春山文典 宙の響
平成29年(2017) 個人蔵

右:【陶磁】
前田昭博 白磁面取壺
平成29年(2017) 個人蔵



黒はすべての色を内に吸収し、 白はすべての光を撥する



生命の赤、 自然の氣



【木竹工】
本間秀昭 流紋—2018
平成30年(2018) 個人蔵



【染織】
森口邦彦 友禅着物 緋格子文
令和元年(2019) 個人蔵

◎作家コメント

春山文典(金工)
宙へのロマンを奏でる音の祭器として表現しました。

前田昭博(陶磁)
白磁の器の肌に影ができることで、作品に生命が宿り存在感を増していく。自分なりの表現とともに、影が魅せてくれる表情を器のフォルムに取り入れたいと思っています。

本間秀昭(木竹工)
日本海の荒波。波のうねりと激しく岩に打ちつける波しぶきを表現した作品です。Uの字に曲げた無数の竹ヒゴを、一本一本、波の模様を意識し、本体に藤止めして制作しました。

森口邦彦(染織)
着物は文字通り着られることで作者が描こうとしたイメージが完成します。白と黒が交叉する立体感のある格子文様は、スパイラルになって身体を被い、緋色の空間は丸味を帯びてくるでしょう。

素材分野紹介

陶磁

陶土や陶石を主原料とする、土器、陶器、炻器、磁器の総称。主にはろくろ成形やひもづくり、たたらづくり、型を用いる成形をし、窯に入れ高温で焼成して仕上げます。近代に西欧の窯業科学と技術がもたらされ、多くの作家が伝統と新しい技術を踏まえて、原料の土石や素地の成形、加飾、施釉、焼成等に自らの創意と技術を工夫した多様な制作を表します。

◎作家コメント

江戸期から伝わる「墨はじき」技法に白の微妙な「雪花墨はじき」と「プラチナ彩」をとりいれ、今までにない大胆な墨色と白の構図の作品に仕上げました。(今泉今右衛門)



今泉今右衛門
色絵雪花薄墨墨はじき雪松文蓋付瓶
令和元年(2019) 個人蔵



中井貞次 森只中
平成24年(2012) 染・清流館蔵

染織

絹や麻、木綿等を材料にして布を染めたり織ったりします。身体に纏う衣類や調度類を被覆する布、空間を彩る掛物の外、現代では糸や布によって空間を造形するといった芸術表現の分野です。布の光沢や肌合いと染料の透明感があり、染の手法や織の感覚、絵画的あるいは装飾的な意匠の描写と構成など多様な創作表現があります。

◎作家コメント

森の中の万物のうごめきやその生命力、エネルギー、森の中にひしめく時空を表現しました。(中井貞次)



伊藤裕司 赤富士
平成27年(2015) 個人蔵

漆工

漆の木から採取される樹液は、日本では縄文時代頃から塗料や絵具、接着剤として、装飾品や日用の什器等に用いられました。奈良・平安時代以降に中国からもたらされた装飾技法をもとに、日本の風土と生活様式のなかで特有の技術と装飾表現を獲得し、独自の美しさに発展してきました。

◎作家コメント

日本人の心の中に一点景を占めている富士を、山容、前景をレリーフにして色漆の塗かさね研出し、月と雲・霞を金箔、白金粉、金粉で表現しました。(伊藤裕司)



中川衛 象嵌臘銀花器「チェックと市松」
令和2年(2020) 個人蔵

金工

金属を素材として、特性の熱による熔解性や叩き延す伸展性等を利用して成形し、さまざまな細工や装飾を施します。日本では古来から、金、銀、銅、錫、鉄を主に青銅や臘銀等の合金を用い、それぞれの特質に適合した技法を発展させ、さまざまな装身具や武具、仏像・仏具、各種の道具や調度品が作られてきました。近年では、アルミニウムやステンレス等の新しい素材を活用しています。

◎作家コメント

タータンチェックと市松模様を重ね合わせたものを、金、銀、赤銅など金属の素材を使い多重象嵌しています。(中川衛)

木竹工

変化に富む気候と風土に恵まれた日本は、檜や松、櫻等の多種多彩な有用樹木や真竹等の竹材が豊富で、古来から、建築とともにさまざまな生活の調度品や道具がつくれられてきました。近代以降、多種な用材とそれに適した技法を駆使して個性的な創作を表す木工と、独自に創意工夫した編組技法と染色、個性的表現を獲得して花籠等の造形や彫刻的な立体を強調する竹工に、現代的な感性を備えた創作があります。

◎作家コメント

光による移動感を感じられるよう曲面を強調し、左右に抜ける抜がりが、舟の前後になる曲面を作り出し、側板も同様に掘り出し舟板の流れを表現しました。(村山明)



村山明 櫻縫拭漆舟形盛器
平成29年(2017) 個人蔵

人形

古くから日本の各地で、呪術や祭礼の道具、また愛玩用にさまざまなものがつくれられてきました。御所人形や、衣裳を被せつけ布を木目込みし、布や和紙貼り、彩色を施した人形などがある。大正時代末期頃から人形創作を訴える作家らが活躍し、現代に至って独自の主題に即し個性的な造形手法と意匠構成を獲得した表現芸術へと高めました。

◎作家コメント

天平の頃、大陸から伝わり古人の心を掴んだ伎楽に登場する吳女をモチーフに、古代の日本人の豊かな国際性を思い制作しました。(林駒夫)



林駒夫 吳女
平成27年(2015) 個人蔵

七宝・ガラス・截金

金属の素地にガラス質の釉薬を文様に盛り、窯で焼成して溶着させた後に研磨して仕上げる七宝。珪砂を主原料に高温で熔解し、かたちをつくり冷却してできる透明なガラス工芸、金箔や銀箔を細長い線状や小片に切って貼り付けて模様とする截金などがあります。

◎作家コメント

花の持つ、清楚で凛とした気品に魅了され、「カラー」の花をモチーフに制作しました。ベースはテンペラ画の石膏の盛上げ技法でレリーフを作り、岩絵具にて彩色し、各色の砂子と金泥等で仕上げました。(月岡裕二)



【截金】
月岡裕二 切金砂子彩箔「凛」
平成27年(2015) 個人蔵

会場構成



自然界にはさまざまなエネルギーが渦を巻いてひしめき合っています。

自然の部分としての人間がその中に身を投じ、そのエネルギーを顕在化した結晶が日本の工芸と考えます。

デザインを床面と展示台に絞ることによって凝縮した展示空間をつくり、作品が映えるように考えました。

即ち床を抽象化された大地(自然)と設定し、大地から湧き上がるエネルギーを、そのまま断面形とする展示台としました。

伊東豊雄

氏
(伊東豊雄建築設計事務所代表)

【略歴】

1941	韓国ソウル市生まれ。父の郷里の長野県下諏訪町で育つ
1965	東京大学工学部建築学科卒業
1965~1969	菊竹清訓建築設計事務所勤務
1971	株式会社アーバンロボット(URBOT)設立
1979	事務所名を株式会社伊東豊雄建築設計事務所に改称

【主な作品】

1984	シルバーハット(東京都)
1991	八代市立博物館・未来の森ミュージアム(熊本県)
1997	大館樹海ドーム(秋田県)
2000	せんだいメディアテーク(宮城県)
2007	多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)(東京都)
2015	みんなの森 ぎふ・メディアコスモス(岐阜県)
2016	バロック・インターナショナルミュージアム・ブエプラ(メキシコ) 台中国家歌劇院(台湾)
2018	新青森県総合運動公園陸上競技場(青森県)

【主な受賞歴】

2002	ヴェネチア・ビエンナーレ「金獅子賞」(生涯業績部門)
2006	王立英国建築家協会(RIBA)ロイヤルゴールドメダル
2010	高松宮殿下記念世界文化賞
2012	ヴェネチア・ビエンナーレ「金獅子賞」(コミッショナーを務めた日本館が受賞)
2013	プリツカー建築賞
2017	国際建築家連合(UIA)ゴールドメダル



「工藝 2020」広報事務局(ユース・プランニング センター内) 担当:大山・池袋・和泉

本展に関するお問合せ先

〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9 ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

TEL: 03-3406-3419 FAX: 03-3499-0958 E-mail: kogei2020@ypcpr.com